

町支部にはなくてはならない貴重な人材であります。

(島根県 星野 誠一)

シベリア抑留記

岡山県 妹尾 正一郎

入ソ

満州国遼陽で武装解除、連隊旗も奉焼して、海城に集合し、ここで捕虜編成がなされた。一千名(入ソ後五百名が加った)で第五大隊となった。そのころは、みんな帰国できるものと信じていた。奉天(瀋陽)、韓国經由で内地に帰るうわさが盛んであった。捕虜を乗せた列車は、奉天を通過し北へ北へと進み、ついにハルビンに到着した。

ここで下車し、四キロほど歩いて、入浴と衣服の滅菌をした(帰国のためと言ったが、実は入ソのためであった)。ハルビンで一週間ほど列車の中で生活をした。この間に、ハルビンからシベリア鉄道のカリム

スカヤまで線路を広めた(同じ広軌でも満鉄は一・四三五メートル、シベリア鉄道は一・五二四メートルである)。

列車は十月二十日、大興安嶺の山越えであった。澄みきった秋空の月の光が、私たちの顔を青白く照らし出していたのをはっきりと覚えている。

列車は山の端を静かに進み感無量であった。ソ連の指揮官は、カリムスカヤからウラジオストックへ行く方が、鉄道が空いているから速いと言った。今までの言動から信用できなかつたが、帰国したい一念から一縷の望みを託していた。カリムスカヤに着いたのは夜であった。列車よ、東に走ってくれ、東に行けば帰国できるかもしれない、夜のシベリア鉄道を走りながら額を床につけ神に祈った。淡い期待も無残に打ち砕かれ、列車は西へ西へと走り続け、夜が明けたら、なんと一面雪景色であった。

ゲネラルパーティ

列車の着いた所はチタ州ヤブロンノワヤであった。ソ連における捕虜は内務省の管轄する一般收容所と、

赤軍の管轄する労働大隊である。私たちは赤軍管轄下の第五一八大隊に編入される。ヤプロノーワヤで各隊各方面に分かれて行った。私たちも二個中隊二百名が最初の収容所ゲネラルパーティに向かった。そのころは個人の私物も沢山あり、中隊の食糧なども持っていて、人里離れた雪の山道を、重い荷物を背負い、二時間歩いてやっと現地に辿りついた。そこで柵（二メートルくらい）の丸太の先を鉛筆のように尖らせ、びっしりつめて並べた柵）の中に追い込まれた。

柵内は切り捨てられた落葉松の枝ばかりで、まだ収容所も建てられていなかった。ここが今から住む収容所かと驚いた。その後は、毎晩雪の降る中での野宿で、焚き火をしながら夜を明かし、苦しい毎日であった。

やがて収容所の家造りが始まった。柱を建てる所に穴を掘り（穴を掘るのが大変である。土地が凍っているので二時間くらい焚き火をしても十センチしか掘れない）、掘った所に柱を建て、後は校倉作りのように丸太を積み重ね、丸太と丸太の間に苔を並べるだけである。屋根にはつつじの枝を並べ、その上に馬糞を十

センチくらい乗せた。馬糞は暖かくてよいが、夏になって雨が降ると寝ていても黄色いずくが落ちてきてまいった。一カ月も作業してやっと二段式の宿舎ができた。ゆっくり休めるかと思つたが、翌日には私たちのような若くて体の強い者百名は一山越した別の所へ移動させられた。今まで一生懸命造つた収容所は五一八大隊の病院になるのだと言つていた。残留者が病院の勤務者となり、軍医の補助を務めたとのことである。

腐った谷

1 作業開始

移動した所の地名は忘れたが、腐った谷という意味でよい感じではない。馬小屋を改造し、床のかわりに丸太を並べて宿舎にした。ただ、柵がないので捕虜気分はしなかった。しかし夜になると宿舎の近くまで狼が出没するので便所も宿舎から遠くへ行くことは禁止された（便所などは勿論なく、野糞であった）。宿舎の中で焚き火をして暖を採つたが、悲しいかな、宿舎自体が馬小屋であつたから、なかなか暖まらない。寒さと睡眠不足が重なって、みなますます体力を消耗

していった。ここで初めて捕虜としての伐採作業が始まった。二人が一組となって、タポール(斧)とピラー(鋸)を持ち、午前八時から午後五時まで規定の時間働いた。主に落葉松の直径四十センチくらいのもので多く、この木を根倒しして枝をはらい、幹を二メートルの長さに切り一カ所に集める。

最後に枝を処理して作業を終わる(枝の処理は、雪のあるときは焼却、ないときは山のように積んでおく。山火事をさける)。これが伐採作業である。木が太い赤松(鋸が短いので切りにくい)や白樺(枝が多く仕事がかどらない)の山に入ると大変である。何しろ不慣れと鋸の切れが悪かったため、思うように仕事はできなかった。

三日間が終わったとき、今まで切ったものを一カ所に集めたら、やっと八立方メートルあった。これが二人、一日分の作業量(ノルマ)と聞かされ啞然とした。翌日からは夜明け前に起こされて作業を始めた。暗くなるまで働かされた。それでも規定のノルマに達せず、夜中作業(実際には根倒しは危険でできない)を

して、朝帰ることも度々あった。勿論その日は夕食抜きであった。着替えもないので、作業が終わって宿舎に帰れば、着の身着のまま横になって寝るだけである。

「窮すれば通ず」こんな日が毎日続いたある日、こんなことをいう者があった。「切れない鋸でいくら頑張ってもソ連の言うノルマは完遂できない。よく切れる鋸で仕事することだ」そのとおりである。それではどうしたらよいか。「そのためには、鋸の目立てのできる人を宿舎に残しておく、昼は寝、みんなが仕事から帰って寝ているとき目立てをし、翌日はその鋸で作業をする。そうすれば作業能率も上がり、検収員も喜ばすこともできる」成程いい考えだ。

だが、ソ連側との交渉が問題であった。中隊長は毅然として交渉に当たった。交渉は案外すらすらと成立した。作業能率も非常によくなり、我々を喜ばしたのは「ヤポンスキー(日本人)は頭がいいぞ」という言葉だった。それでも伐採作業はきつく、食糧事情もよくなかった。作業の帰りはおそくなり、宿舎には勿論、電灯もないので、明るさと暖をとるため白樺の皮を燃

したが、油煙で顔も衣服も真っ黒になった。だんだんと栄養失調で痩せ衰えていった。顔のむくんでくる者も増えてきた。特に伐採は重労働で、栄養失調のため死亡する者も多かった。老衰で死亡するようであわれであった。死亡者は火葬にし（山の中であるから、材木が沢山あるので簡単であった）、死亡年月日、住所、氏名などを書いてお互いに知人が持っていた。何度かの装具検査にも、紙片を口の中に入れて隠したり、服の中に縫い込んだりしていたが、最後にモグゾン（後に述べる）の装具検査で遺骨と共に取り上げられ、誠に残念であった。

馬も人間だ

ソ連の習慣や実情を知っておかなければいけないことを身をもって体験した。伐採作業も一応終わり、次は自動車積み込みと橇作業に分かれた。私も馬橇で自動車積み込みの現場まで材木を運んだ。昼も近く、人も馬も空腹と疲労で気が立っていた。ノーノー（馬を追う声）と言っても馬は動く気配さえない。ついに怒って近くにあった木ぎれで馬の尻を殴打した。これがい

けなかった。自動小銃を持った歩哨がつかつかと来たと思うと、持っていたむちで私の背中を思いきりなぐって咆哮した。私は失神してその場に倒れたが、ややあつて同僚が、「馬も人間と同じだ。馬をたたく奴はたたかれる」と怒鳴ったと言った。

サハリン（辺鄙な土地の意）

1 気候風土

昭和二十一年五月十五日、サハリンに移動した。ここには最初から入山していた部隊がいた。私の捕虜生活二年九カ月のうち最も長く、最も苦しい所であった。サハリンの生活で骨身にこたえたのは、過酷な労働、粗悪な食事による飢餓、そして厳しい寒さであった。入ソが前年の十月であったから、野山は勿論銀世界であった。

シベリアの雪は多くはない。九月ごろから降るが、この雪は消えて冬じゅう残るのは十月の雪である。積雪は年間を通じて一メートルくらいである。雪は少ないが冬は殊に寒く、気温は零下二〇度か三〇度は常である。零下五〇度以下になると作業は中止される。反

対に夏は殊の外暑い。特に「ぶゆ」が多く出て作業能率を下げた。

夏至のころは、白夜といつて、太陽は三時間ほど山に入るが、一晚中うす明るく、午前二時ごろには山の方から太陽は出る。シベリアには春、秋の季節はほとんどなく、夏が終わればすぐ冬だ。五月の終わりごろまでは雪があり、六月ごろの朝は道の水溜りは凍っているが昼になると猛暑である。収容所の北側に幅五十メートルくらいの浅い川があったが、飛び石で顔を洗い、昼食の代わりに（朝食のとき昼食分も食べてしまふ）飯盒に水を汲んで作業場へ行った。冬は川が凍っているので山の雪を飯盒でわかつて昼食にした。

最初の冬は、入ソの際着用していた軍隊用の夏服で防寒の備えもなく、靴も編上靴（軍隊用の革靴）であったから、凍傷患者が多く出た。しかも麻酔薬がないので、凍傷にかかって、骨まで見える手や足の指を切断することが多く、手術も痛そうで見えておられなかった。ノルマもだんだん多くなり、作業現場も収容所から遠くなつていった。栄養失調になると歩くことが大変で

ある。細い木ぎれにもつまずいて転んでしまうことが多く、作業現場に辿りつくのがひと苦労であった。冬の寒さは刃物で切られるようで、タオルなどで顔を覆つて現場へ往復した。そのため、自分の吐いた息で眉やまつげが真っ白くなり、浦島太郎のようであった。

2 乏しい食糧

厳しい労働を強いられながら、それを捕う栄養は極度に乏しく、また粗悪であった。飢えでやせおとろえた体に酷寒、重労働が重なつて、ちょっとしたことか死につながり、多くの人が死亡した。当時のソ連の捕虜取扱規則によると、一日、黒パン三百グラム、雑穀三百グラム、野菜六百グラム、油五グラム、獣肉五〇グラム（骨、内臓を含む）、塩一〇グラム、砂糖一五グラム（キャラメルときもあつた）、これなら結構な量である。

しかし、実際に捕虜の手に渡つたのは桁違いに少ない。大方は二百グラムにも足りない黒パンが弁当（実際には朝食に食つてしまつた）、朝夕はカーシャ（粥）であつた。勿論うすいので箸の必要はなく、すするだ

けで十分であった。特に生野菜の量が少なく、春になればアカザやきのこを煮て食べた。これは、ソ連の管理者や糧秣受領者がピンはねしたり、地方人に横流しされ、その残りが捕虜の食糧となったためである。当時こんな川柳が盛んにうたわれた。「末世かな、高粱米をはりたおし」。当然米の方が美味しく、高粱の比ではない。しかし、カーシャ(粥)にすると米は三倍くらいにしかないが、高粱なら四倍に増える。同じ目方なら高粱の方が堅くなるので珍重がられた。「五分確保、水汲みノルマ一度ふえ」カーシャはうすくても、一人で飯盒に半分は食べたい。これがみんなの願いであった。この願いを満たすために、炊事の水汲みは一日のノルマを一回余分にするという意。

3 ノルマに泣く

伐採作業は特にきつかった。私の小隊の検収員は、融通のきかない二十歳くらい女性であった。午前中は別に用事がないので、山裾で私と雑談したり、歯磨粉をおしろいだといって顔に塗り、内地の娘さんより美しいとおだてているうちはご機嫌であるが、午後の検

査になると極めて厳格で我々を困らせた(ソ連の女性の全てがこんな人ではない。念のため)。ある日、検査の最後の組が伐採後、枝の後始末がしてなく雪の中にちらばっていた。いつものごとくチースト、チースト(掃除、掃除)と言って聞かない。疲労困憊している二人には、枝の片付けなどできないと思い、「よし俺がやる。お前も見ておれ」と言って二人を帰し、雪の中の枝を片付けたが、どう考えてもやれるものではない。いつの間にか検収員もいなくなっていた。「死のう」後は何も考える余裕がなかった。寒いので今日切った材木に火をつけた。狼は近くで吠えているが、火を見て近寄ってこない。「だれでも死にたいくらいつらいんだ。だが、命のある限りこの苦しい生活を耐えぬき、一人でも多くの捕虜を日本に送り届けるのが我々の務めだ、お互いに頑張ろう」と同志に言われた。私は感激し、申し訳ないことをしたと思い一晩じゅう泣いた。

4 ダモイ騒動

昭和二十年十二月ごろであったろう。コックリ様を

使う人が別の棟にいて話題となった。何月何日には貨車積みみの列車が入る。それも十八トン車が何両、二十トン車が何両と、絶対当たるとの評判であった。そのコックリ様が、六月十五日にはダモイ（帰国）だと言ったのでみんな騒ぎだした。

六月になると仕事も手がかない状態だった。前日の六月十四日は伐採もせず、山の中腹で焚き火を囲み帰国の話に夢中だった。突然、一人が「ダモイ」と叫んだ。遠く of 山裾を伝令が馬に乗って、ソ連の兵舎に入ったのである。同時に大勢の歩哨が日本人の収容所に行き、病人など残留者の装具を点検しだした。みんなは、「万歳」と力いっぱい叫んだ。

仕事など問題ではなかった。作業場にも帰るよう指示があり、収容所に帰って装具の検査を受けた。本当に嬉しく、みんな有頂天になって喜んだ。

翌日、装具を肩に、山道をヤプロノワヤに向かって山を下った。ヤプロノワヤの部隊も移動の支度をしている。私たちの乗る貨車も引込線に入り糧秣を積んでいた。絶対ダモイだと信ずると同時に、今までの

過酷な労働も、飢えも、寒さも忘れて、心は内地に飛んでいた。一週間も待ったが一向に乗車命令はない。いつの間にか貨車も引込線からいなくなっていた。仕方なくまたサハリンの山の中へ、重い装具を背負って四キロの道を逆戻りした。後から聞いた話によると、移動はダモイではなく、炭鉱は食糧事情も悪く、ノルマも多いとのことであった。クワバラ、クワバラ。

5 栄養失調の検診

二カ月に一回くらい、女医さんによる栄養失調の検診が行われた。颯爽と長靴で闊歩する姿は、女医さんとは思えないほど勇ましい。聴診器による内臓の検診はまだよいが、栄養失調の検査は股の肉をつねる（肉の厚さで調べる）だけで決定される。女医さんに点数のない者は、なかなか栄養失調になれないといううわさであった。栄養失調になれば、一カ月間作業が休める規定なのでみんななりたかった。私も一回だったが、残念なことに休む機会には恵まれなかった。一回目は休む代わりに炊事係となり水汲みをした。炊事当番は食事が多いので、三週間で六十五キログラムになり、

途端に原隊復帰となり作業に回された。二回目は思想教育の一環であろう。

6 やまと新聞

飢えと寒さときついノルマ、捕虜の体もだんだんと枯れていった。宿舎の中でも黒パンの盗難が多く、炊事の糧秣倉庫からも盗まれた。犯人は寒い冬の宿舎の出入口に縛られ、三日目に死んでいった。炊事の糧秣を盗んだ者は懲罰として営倉（地面を掘った穴で、暖房はない）に一夜放置された。「寒い、寒い。許してくれ。出してくれ」と泣き叫びながら翌朝死んでいった。

こんな状態でよいのか、何とかしなければという声で大和（やまと）という壁新聞が作られた。毎日の生活の心得や漫画、ダモイ物語、歌、意見などいろいろ書かれた。私も五譲礼節、誠実、和などについて投稿した。ところが、この新聞が反動新聞だといわれ問題になった。私もソ連側の調査に何度か呼び出されたが、別に内容が悪いのではなく「大和」（やまと）という名前が反動的ということでおさまった。

7 通信

昭和二十二年十月ごろ、サハリンの抑留者十名に對して「往復はがき」が渡され、留守宅に通信するように言われた。手紙は検閲が厳しく、自分の働いている内容やソ連のことはいっさい書けなかった。

私の家に届いたものである。家では返信を出したということだったが受け取ってはいない。

「拝啓 久しぶりのお便りです。御一同様お元氣にお暮らしの御事とご推察致します。小生もお陰様にて元氣旺盛任務に邁進し面接出来る日を楽しみに日々を送っています。御地の状況を新聞で見たり、噂で聞いたりしておりますが私たちの想像以上の御事と存じます。皆様暮々も御身大切に、御一同様によろしく。敬具」

8 みんなで楽しむ「演劇団」

壁新聞は作る。暖かくなる。作業ノルマも上がる。食糧事情も少しはよくなって、生活もおいおい安定してきた。そのころから、ソ連側も民主運動を奨励したり、日本人の要求も入れるようになった。余裕が生まれ、生活を楽しみたいという欲望もある。日本人で

「演劇団」を作ったかどうかということになった。捕虜の中からも浪花節、漫談、漫才、音楽の得意な者も揃った。これらの者は軽作業に回され、作業中も練習に励んだ。後には演劇団員は交代で作業を休み練習することも許された。

音楽部の活動は大変であった。大工が木をくりぬいてバイオリンの胴部を作り、弦は自動車の運転手(ソ連人)に頼んで針金(細いもの、太いもの)をもらい、低高音を出した。弓は機作業の者が、馬の尻尾の毛を抜いて作った。全員の苦勞の作であったが音程はどうだったか。ソ連人は音楽が好きで、毎晩のように聞きに来た。後には、ソ連の歌の楽譜を取り寄せて伴奏したら、歩哨も検収員も大喜びで歌い、踊った。ヤポンスキー(日本人)はソ連の歌もわかるか(オーチンハラシヨ、非常によい)と賞賛された。芝居、講談、漫才、浪花節など日曜日ごとに行ったが、「父帰る」「かに工船」など、働く人民の勝利につながるものがよかった。芸が身を助けるとはこのことか。

五十七地区

幸いなことに私は、最初のころの五十七地区に配属されたことはなかった。元来歩哨は捕虜を保護するのが任務である。その歩哨が検収員(作業量の検査をする人)と同調し、作業管理を盾に栄養失調による重症患者、歩行困難な者、回帰熱患者(繰返して熱の出る病気でシラミ、南京虫などが病原菌の媒介をする)など病気に苦しむ患者まで作業に追い出すので、歩哨や検収員は蛇蝎のごとく忌み嫌われた。病人が作業に出れば、健康な者は病人の面倒を見ながら、病人の分までノルマが要求される。作業中患者が寒いので焚き火の所に外套にくるんでおき、休みになって帰って来ると、焚き火の中に倒れて焼け死んでいたり、作業を終わる病人を背負って、やっとの思いで宿舎に辿り着いたら死んでいた、という者も少なくなかった。ちなみに、第五大隊千五百名中約半数の七百名くらいが死亡しているが、この地区の宿舎には廊下まで患者がいる、死者がいる、歩く道もない有様だった。

朝の点呼には、週番が寝ている者の頭をたたいて回り、目を開けばよいが、開けない者は死者として裸

にして外に運ばれた。山と積まれた死体は、炊事の水汲みが桶に入れて山に捨て、帰りにはその桶に食事に使う水を汲んで帰って来る有様であった。まるで地獄だ。帰国の希望も空しく死んで行った同胞の怨念が、落ち着くこともできずに、が五十七地区であった。奇しくも一年後、私たち七十名はこの地区の整理作業に派遣された。すでに前にあった宿舎は焼きはらわれ、新しい宿舎であったが、検収員は前と同じお婆さんであった。私は作業班長で前のこともあり心配したが、婆さんは当時のことを思い出してか、ノルマについては厳格でなく大助かりであった。

モグゾン

1 移動

昭和二十三年三月ごろ、サハリン、ヤプロノワヤ、その他の地区の作業も残務整理の段階になり、大部分がモグゾン（ヤプロノワヤの西方約五十キロ）に移動することになった。移動がまた大変であった。最初は客車で行く予定であったが、指揮官が交通費を着服しているので切符がなく客車に乗ることはできなかつ

た。仕方なしに切符のいらぬ貨車列車で行くことになり、駅に止まっている無蓋車に乗れと言われた。

シベリアの三月と言えばまだ寒い。これに乗って行ったら途中で凍死することは明らかである。「降りると殺すぞ」歩哨が無蓋車に乗っている我々に銃を構えている。「仕方がない、殺すわけないから列車が動くまで。動き出したら飛び降りよ」といって寒さに震えながら乗っていた。動き出したら飛び降りた。何度降り返しても駄目だった。指揮官は怒って「なんでもよいから、モグゾンまで行け」ということになった。行くのはよいが、困ったことに字が読めない。モグゾンがどこにあるかわからない。無茶苦茶である。少人数に分かれ、扉のある有蓋車を探して乗った。それでも寒くて一晩中震えていた。明け方止まった駅がモグゾンであった。先発隊が迎えてくれたので大助かりであった。大急ぎで次から来る者に伝えた。駅で全員集合し、新しい作業（駅から四キロくらい入った山の中）へ行つたが、山は原始林で全部伐採を終るには三年はかかると言われ、みんな嘆いた。

2 同盟休業（ストライキ）

モグゾンでは五小隊に分かれて伐採作業を行った。みんな頑張ったが検収員が意地悪で、作業量をノルマの三〇パーセントくらいにしか書かなかった。私たち五名の小隊長は、毎晩のようにソ連の大隊長室に呼ばれ、ノルマの督促を受けた。いくら頑張ってもこの検収員ではやりがいが無い。収容所におけるストライキは、厳しい管理体制で不可能である。各小隊長は決死の覚悟でストライキに入った。

翌日から、伐採の現場には行くが、焚き火を囲んで仕事はしなかった。ところが、一番初めに困ったのが検収員であったから皮肉である。作業終了後、検収員の書いたノルマ表に日本の小隊長が署名し、事務所に届けることになっている。事務所に届いたノルマ表も小隊長の署名がないので通用しない。したがって、検収員は仕事をしていないことになり、食糧の配給が停止された。検収員は困って、寝ている各小隊長に署名するよう依頼に来たが、個人的には絶対署名しなかつた。ついに五名の小隊長と検収員が山の中で団体交渉

することにになり、雪の中で相対して交渉した。以後、作業量を百パーセントに書くということで妥結した。その後は、日本人も真剣に作業に励んでノルマの完遂に協力した。

ダモイ（帰国）

1 出発

五月になって、ソ連の大隊長当番（日本人）が「まだ、六月からの作業計画がこない」と言った。各隊には急にダモイの噂が広がった。まさかとは思ったが、そのころから何回かの装具検査が行われた。いつの検査にも大目に見られていた、針、糸、死亡者の氏名の書いてある紙片、遺骨まで全部没収されてしまった。いよいよダモイかな、心ひそかに、そんなことを願った。

ある日、捕虜は一カ所に集められ、ソ連の大隊長から正式に帰国の伝達があった。広い野原で最後の装具検査があり、駅に向かって歩いた。今までの長かった苦しみも忘れ、欣喜雀躍、みんな心から喜んだ。列車の中でも（勿論 貨物列車）、内地の話に花が咲いた

が、前にいたヤプロノワヤを通過するときは、全員起立して英霊に訣別し、まだ病院に残って懸命に療養につとめている者の健康を祈り黙禱した。帰国者全員滂沱^{ほうた}の涙を流し、別れを告げた。

途中ハバロフスクでは、日本新聞のメッセージを受けなければならぬ。この答辞の巧拙と民主化の状態によっては、シベリアへの逆戻りもあるといわれた。我々の部隊は、作業中、ソ連語に精通しているソ連の大隊長当番が、上等兵でありながら指揮官になっていたため第一関門は無事に通過した。上級者が指揮官であれば、民主的でないと判断されることを考慮したものである。

2 ナホトカ

長い期間、貨車列車にゆられ、やっとナホトカに着いた。そこでは海岸の天幕生活であった。昼は四キロもある遠い山から、石を運んで来て海に捨てるのが仕事であった。夜はおそくまで、幕舎^{まくや}ごとに労働歌を競い合って歌った。いずれも部隊の共産化、民主化の評価の対象となり、良好なものから帰国させられた。と

にかく、朝から夜まで戦々兢々として、忙しい毎日であった。共産主義、民主主義が徹底したと評価された部隊、作業能率のよい部隊は、第一、第二、第三分所とスムーズに通過していくが、そうでない部隊は、せっかくここまで来ても、またシベリアへ逆戻りすることも少なくなかった。私たちの部隊は、作業能率が良いというので無事に通過して第四分所に入った。ここまでくればもう大丈夫。逆戻りは絶対がない。日本から来る迎えの船を待つばかりである。ここで今までの上等兵の指揮官は上級者と代わった。飢餓、重労働の悪夢もさめ、楽しく、ゆったりとした生活であった。各県の県人会名簿もそなえてあり、みんな喜んで署名をした。名簿には、すでに帰った知人も大勢いて驚いた。今日は来るか、明日は来るかと、ただひたすらに帰国船の入港を待ちわびていた。

ある日、海の彼方から待望の帰国船が入港した。ナホトカ港で信濃丸に乗船、一段一段とタラップを上る足も軽やかであり、乗り口でソ連兵が乗船者の名簿を先頭の者に渡し、上り終わった所でアメリカ兵に手渡

した。船上でアメリカ軍の点検を受け終わったとき、
いよいよ帰国できるのだとみんな抱き合って泣いた。
船は静かな日本海をすべるように舞鶴に向かった。

3 舞鶴

ナホトカを出発した信濃丸は、真っ青の日本海を静かに進み、まるで夢でも見ているような、感激の船路であった。「あっ、日本だ！」の声にみんな甲板にかけより、遠くにかすんで見える丹後半島の山々を見つめた。みんなの目からは涙、涙、涙。山影もくっきり見えるようになり、船は舞鶴の港内を静かに桟橋に向かった。年老いた者、若い者、上級者も下級者も日本の懐かしさに狂喜した。船はドドッとにぶい音を立てて止まり、錨が下ろされた。桟橋から一步一步、しっかり踏みしめながら上陸する。故国の土だ、懐かしい日本の土だ。出迎えてくれた白衣の看護婦さんの姿も、目に痛いほど美しく感じた。上陸後直ちに入浴して衣類の支給を受け、予防接種、DDTの消毒などを終わり、二階の大広間の畳の上に寝ころんだとき、「やっ」と帰国できたんだ」という実感が、ひしひしと身に感

ぜられた、その日こそ忘れもしない、日本晴れの昭和二十三年六月二十三日であった。

酷寒と白夜のシベリア強制抑留

福島県 相田 正明

一、出生から入隊

大正十二年十二月十九日、会津若松市で出生、家業漆器製造販売。家族、両親、伯母、弟。昭和十六年、福島県立若松商業学校卒業。

伝統産業である会津漆器卸商、鈴善漆器店大阪支店東京支店勤務。昭和十八年六月、デパート問屋派遣店員として上野松坂屋に従事中、戦時下における平和産業従事者への徵用令（白紙召集）にて、愛知県豊川海軍工廠へ海軍軍属として徵用される。

寮に入り、海軍の予備下士官による約三カ月の特訓を受け、朝から晩まで徹底して滅私奉公、生産増強の団体教育であり、自由も言論もなく問答無用の、まる